

研究

中国における学齢前幼児の生活能力

— 保護者と保育者に対する意識調査から —

高 健

〔論文要旨〕

中国における学齢前幼児の生活能力を、保護者と保育者の両者により評価し、学齢前幼児が身につけている生活能力を把握した。その結果、「一人っ子社会」における中国の学齢前幼児は、「年齢相応の道徳性」、「基本的な生活習慣」、「友だちと協調していける力」などの能力が不足している傾向にあることが明らかになった。保護者と保育者の評価の違い、親のしつけの基準の甘さ、家庭教育が十分機能していないことなどが本研究から指摘された。

Key words : 中国, 学齢前幼児, 生活能力, 意識調査, 幼稚園教育

I. はじめに

「科挙」の伝統を持つ中国では、「一人っ子政策」によって子どもの知的達成に対する親の期待がさらに高まってきた。特に、90年代以降、親の子どもへの教育的期待は、目標がほとんど一致している。つまり、親が子どもを大学に進学させるという期待は一般のものとなっている。その大学進学熱は高校だけではなく、中学校、小学校にまで学力競争が降りてきている。その影響はさらに就学前にも及び、幼稚園の少なからぬ層を早期教育の渦のなかに巻き込んでいる。親の子育て観も競争意識（「望子成龍」、「成名成家」、すなわち自分の子が非凡な人材になることや、有名人・大学者になることも望んでいる）に支配されていることが多く¹⁾、子どもの知的発達を重視しすぎる傾向も見られる。

このような背景において、中国における学齢前幼児の保護者および保育者は子育てや子どもの教育に対して、どのような意識を有している

のであろうか、また、幼稚園教育を通して、学齢前幼児の身につける生活能力がどのような状態にあるのかを把握するために、中国の天津市においてアンケート調査を実施したので報告する。

II. 対象と方法

1. 調査対象

調査対象は、中国天津市内の7区にある16幼稚園の園児とその母親（保護者）1,347組および園長・教諭など（保育者）238人であった。

天津市は中国華北平原の東北部に位置しており、中国の直轄市であると同時に、中国経済の中心の一つでもあり、現代中国都市部の家庭や地域社会の縮図とも思われる。人口は942万人、そのうち、市内人口は497万人である。全域には市内の13区と郊外の5県がある。天津市の「一人っ子政策」の実施がよいのは、本研究の対象地域になる理由の一つである。

中国では、一般的に、幼稚園は3～6歳児、

Chinese Preschool Children's Living Ability

— From the Investigation on Awareness of Guardians and Kindergartener —

Jian GAO

中国天津中医薬大学（専業講師）

別刷請求先：高 健 中国天津中医薬大学 中国天津市南開区鞍山西道312

Tel : 8622-23052082

[1515]

受付 03. 4. 2

採用 06. 4. 6

保育園は1～3歳児の保育を行っている。本研究の調査対象施設には保育園は含まれていなかった。

2. 調査内容

1) 基本調査

保護者に関する調査内容は、①年齢・職業・学歴、②子どもの数、③家族構成、④家庭教育の方針の4項目からなる。なお、父親の職業と学歴について詳細な調査はしていなかった。

保育者自身に関する調査内容は、①年齢・学歴、②担当している子どもの年齢、③保育の経験年数の3項目からなる。

2) 学齢前幼児の身につける生活能力に関する調査

「年齢相応の道徳性」、「基礎的な生活習慣」、「友だちと協調していける力」などの計10項目について、保護者にはわが子が身につけているかどうかを、保育者には子どもたちが身につけているかどうかを、「十分身につけている」、「ある程度身につけている」、「あまり身につけていない」、「ぜんぜん身につけていない」の4段階で評価した。また、幼稚園で身につけることができるかどうかを、「十分身につけることができる」、「ある程度身につけることができる」、「あまり身につけることができない」、「ぜんぜん身につけることができない」の4段階で保護者と保育者に評価してもらった。

3) 子育ての保護者の関心事に関する調査

「子どもの健康」、「子どもの友だち付き合い」、「子どもの道徳性の獲得」などの計9項目を挙げ、「とても気になる」、「まあ気になる」、「あまり気にならない」、「ぜんぜん気にならない」の4段階で保護者と保育者に評価させた。また、「教育や子どもについて、日ごろ感じていること」を保護者と保育者に、「最近の保護者と園児に特徴的なこと」を保育者に、自由に記述してもらった。

3. 分析方法

学齢前幼児の身につける生活能力については、「十分身につけている」、「ある程度身につけている」と答えた保護者と保育者の割合を求め、「学齢前幼児の身につける生活能力の到達度」とした。幼稚園教育を通して、身につける

ことができる生活能力については、「十分身につけることができる」と答えた保護者と保育者の割合を求め、「獲得できる生活能力における幼稚園教育への期待度」とした。子育ての保護者の関心事については、「とても気になる」と答えた保護者と保育者の割合を求め、「子育てに対する保護者の関心度」とした。それぞれの割合が高いほど幼児の身につけている生活能力の程度が高い、保護者または保育者の幼稚園教育に対する期待および子育てに対する関心の程度が高いとみなした。有意差の検定は χ^2 検定によって行った。

自由記述のまとめについては、子どもの「基本的な生活習慣」、「道徳性と礼儀作法」、「友だちとの付き合い（園内と地域）」、「健康・体力および遊び」、「学習に対する態度と習慣」、「自主性と忍耐力など」の6項目に分類し、「子どもの様子」（または「園児の様子」）、「親の対応」（または「親の様子」）、「不安」、「要望」の4類型に分けた。「不安」は子どもや社会全体の将来を危惧する記述および自分の子どもに対する接し方が子どもにどのような影響を与えるのかを心配する記述、「要望」は社会と幼稚園に対しての不満と望みを述べている記述である。

統計解析にはSPSS10.0J for Windowsを使用した。各検定とも有意確率0.05未満を有意とした。

Ⅲ. 結 果

1. 調査対象のプロフィール

1) 学齢前幼児のプロフィール

表1に対象児の年齢別、性別の人数分布を示した。3歳0か月以上から6歳6か月までの幼児1,347名（男児678名、女児669名）は全員3歳になった時点で入園した。きょうだい数ではすべて一人っ子であった。家族形態では核家族が65.1%（877名）、三世帯家族が34.9%（470名）であった。

2) 保護者（母親）のプロフィール

表2に母親の学歴・職業・年齢分布を示し、30歳代前半の母親が最も多く、ついで20歳代後半であった。職業の判定基準は職務および勤務先によって分類したが、母親の97%が仕事を持っていた。また、調査対象施設のなかに大学

付属幼稚園の1園が含まれており、母親の学歴が高いほうに（大学院・大学・短大卒）偏っていた。

3) 保育者のプロフィール

表3に保育者の学歴と経験年数を示した。専門学校卒の保育者が最も多く、ついで短大卒であった。経験年数は11年以上が半数以上であり、最長は38年であった。調査時点で、担当している子どもの年齢は、3歳クラスが49名、4歳クラスが53名、5歳クラスが51名、6歳クラスが52名、その他、幼稚園長が17名、園医が16名であった。

2. 家庭教育の方針について

家庭教育の基本となるものと思われる「子どもの将来への期待」、「子どもの性格と子ども自身の希望」、「幼稚園の方針」などの計10項目を挙げ、3項目まで保護者に選択させた。

上位3つを挙げると、保護者の全体で「子どもの将来への期待」(64.8%)、「自分が受けた家庭教育」(60.4%)「夫婦で話し合って決めたこと」(57.4%)、の順になる。「子どもの将来への期待」が家庭教育の基本となるのは、世代継承されてきたもの、または「夫婦で話し合っ

て決めたこと」と読み取れる。また、育児について、妻任せではなく、夫婦で話し合う、そして2人で決める、という家庭教育における「夫婦協力」の実態が窺われる。ところで、「幼稚園の方針」を選んだ保護者は全体で22.9%に過ぎなかった。しかし、後でみるように、「幼稚園教育を通して、～身につけることができると思うか」と尋ねると、「十分身につけることができる」と答えた保護者は多く、「子どもの将来への期待」を幼稚園教育にもかけていると言えよう。

これを年齢別（30歳未満と30歳以上）、学歴別（高学歴群：大学院・大学・短大卒、低学歴群：高校・専門学校・中学校卒）にみると、「子どもの将来への期待」を家庭教育の基本としているのは、全体で半数以上を超え、学歴の低い場合に多く、低学歴群にはこの傾向がもっと顕著であった（ $p<0.001$ ）。なお、年齢別において、統計的に有意差はなかった。子どもにかかる期待の高さは母親の年齢より母親の学歴と関与しているといえよう。

3. 学齢前幼児の身につける生活能力の到達度

表4に10項目の到達度を示している。「十分身につけている」、「ある程度身につけている」と答えた保護者の割合は、全体で80.0%～95.0%を占めており、「年齢相応の道徳性」、「友だちと協調していける力」、「基本的な生活習慣」の3項目が上位の1～3位であった。一方、保育者の割合は、全体で12.6%～75.6%を占めている。これを保育者の経験年数別（10年以下と11年以上）、学歴別（専門学校卒と短大・大学卒）にみると、「年齢相応の道徳性」を肯定する経験年数の短い保育者の割合は、経験年数の長い保育者の割合を上回り、「音楽や絵画に親しむ

表1 対象児の年齢別・男女別人数

年 齢 区 分 (年：月単位)	男 児 人数 (%)	女 児 人数 (%)	合 計 人数 (%)
3：0超～3：6	102 (48.6)	108 (51.4)	210 (100)
3：6超～4：0	96 (51.1)	92 (48.9)	188 (100)
4：0超～4：6	101 (49.5)	103 (50.5)	204 (100)
4：6超～5：0	98 (50.3)	97 (49.7)	195 (100)
5：0超～5：6	90 (51.1)	86 (48.9)	176 (100)
5：6超～6：0	90 (50.0)	90 (50.0)	180 (100)
6：0超～6：6	101 (52.1)	93 (47.9)	194 (100)
合 計	678 (50.3)	669 (49.7)	1,347 (100)

表2 保護者（母親）の基本属性

学 歴	人数 (%)	職 業	人数 (%)	年 齢	人数 (%)
大 学 院 卒	35 (2.6)	管理・専門・事務	337 (25.0)	25歳～29歳	283 (21.0)
大 学 卒	296 (22.0)	技術系従事者	235 (17.5)	30歳～34歳	804 (59.7)
短 大 卒	409 (30.4)	労働者	320 (23.8)	35歳～39歳	210 (15.6)
高 卒	324 (24.1)	サービス業	363 (27.0)	40歳～	50 (3.7)
専 門 卒	229 (17.0)	自 営 業	52 (3.9)	平 均	31.8±6.2歳
中 卒	54 (4.0)	専業主婦・その他	40 (3.0)	範 囲	25歳～47歳

態度」を肯定する経験年数の長い保育者の割合は、経験年数の短い保育者の割合を上回り、統計的に有意差があった($p<0.05$, $p<0.01$), なお、学歴別において、統計的に有意差はなかった。

4. 獲得できる生活能力に関する幼稚園教育への期待度

図1に10項目への期待度を示している。「十分身につけることができる」と答えた保護者の割合は、全体で41.4%~68.1%を占めており、年齢別、学歴別において、統計的に有意差はなかった。一方、保育者の割合は、全体で10.1%~26.9%を占めているのに対して、「ある程度身につけることができる」と答えた保育者の割合は48.7%~79.8%であった。これを保育者の経験年数別、学歴別にみると、各群間に統計的に有意差はなかった。

保護者と保育者の認識を比べて、すべての項目で保護者が保育者より、獲得できる生活能力

に関する幼稚園教育への期待が高かった (いずれも $p<0.001$)。

5. 子育てに関する保護者の関心度

図2に子育てに関する保護者の関心度を示している。保護者自身の評定をみると、「保護者同志の関わり」、「子どもと地域の人たちとの関わり」、「子どもの遊びの内容」の3項目を除き、他の6項目は半数以上(52.2%~93.8%)の保護者が「とても気になる」と答えており、年齢別、学歴別で示した関心度はほぼ同じ傾向であった。保育者から見た保護者の態度は、「子どもの健康」、「子どもの文字や数字に対する興味」以外のことに、関心が低く、平均31.7%の保護者が「ぜんぜん気にならない」態度を示している。保育者の経験年数別、学歴別でみた保護者の態度もほぼ同じ傾向であった。

6. 保護者と保育者の自由記述

自由記述の記入率は、保護者が80.7% (1,087名)、保育者が100%であった。保護者の自由記述をみると、「子どもの様子」についての記述の割合は平均32.6%、「子どもの学習に対する態度と習慣」という内容が最も多かった(41.1%)。「親の対応」についての記述の割合は平均33.6%、「子どもの基本的な生活習慣」という内容が最も多かった(52.4%)。「不安」

表3 保育者の学歴・経験年数別人数

学歴	人数 (%)	経験年数	人数 (%)
専門学校卒	182 (76.5)	5年未満	12 (5.0)
短大卒	42 (17.7)	5~10年	62 (26.1)
大学卒	14 (5.9)	11年以上	164 (68.9)

表4 保護者・保育者および保育者の経験年数別による到達度の評価

(%)

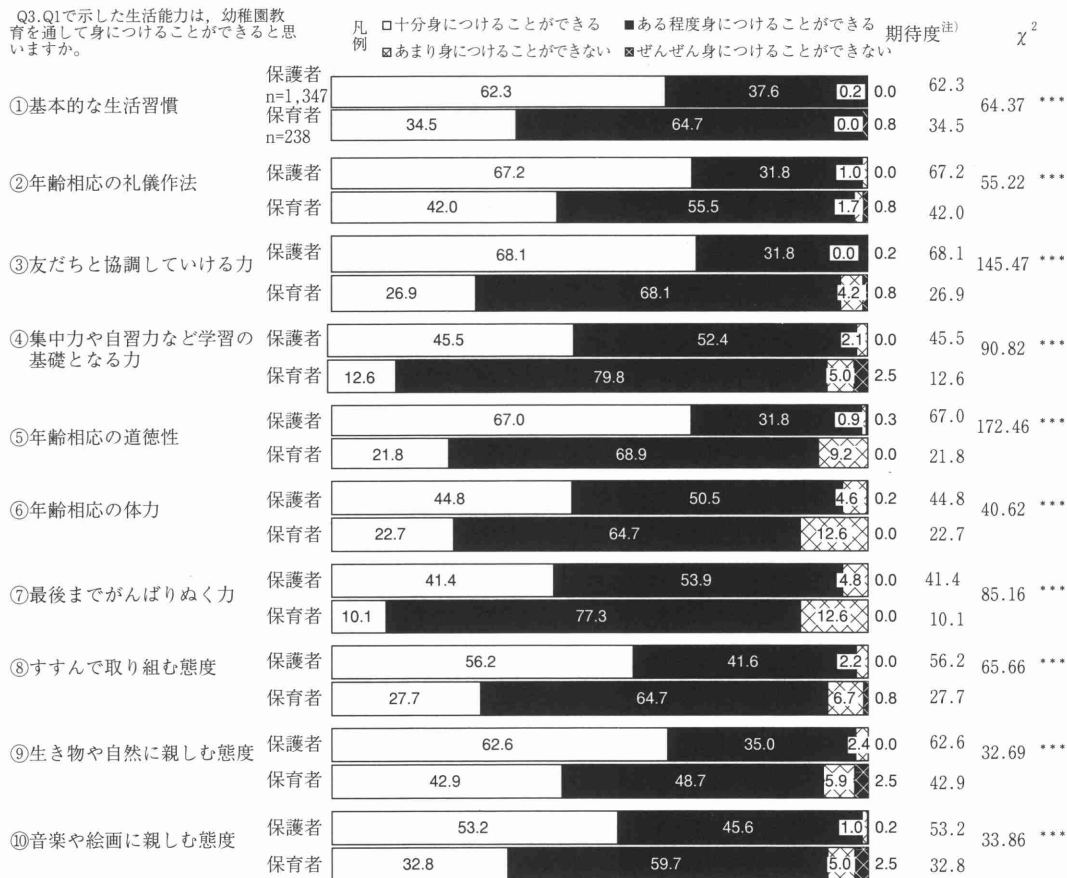
項目	保護者・保育者による評価		χ^2	保育者の経験年数による評価		χ^2
	保護者	保育者の全体		10年以下	11年以上	
①基本的な生活習慣	93.0	45.4	378.3***	41.9	47.0	0.5
②年齢相応の礼儀作法	89.9	45.4	287.1***	37.8	48.8	2.5
③友だちと協調していける力	93.0	12.6	848.1***	14.9	13.1	0.5
④集中力や自習力など学習の基礎となる力	85.3	26.1	393.9***	18.9	29.3	2.8
⑤年齢相応の道徳性	95.0	47.1	435.2***	56.8	42.7	4.1*
⑥年齢相応の体力	93.0	40.3	443.0***	47.3	37.2	2.2
⑦最後までがんばりぬく力	80.0	19.3	361.3***	13.5	22.0	2.3
⑧すすんで取り組む態度	92.7	40.3	432.0***	43.2	39.0	0.4
⑨生き物や自然に親しむ態度	89.0	75.6	32.0***	67.6	79.4	3.8
⑩音楽や絵画に親しむ態度	92.0	83.2	18.5***	73.0	87.8	8.0**

到達度: 「十分身につけている」、「ある程度身につけている」と答えた保護者と保育者の割合を示している。

経験年数10年以下: $n=74$, 経験年数11年以上: $n=164$

***: $p<0.001$, **: $p<0.01$, *: $p<0.05$

Q3.Q1で示した生活能力は、幼稚園教育を通して身につけることができると思っていますか。



注) 期待度：「十分身につけることができる」と答えた保護者と保育者の割合(%)を示している。***: $p < 0.001$.

図1 獲得できる生活能力に対する幼稚園教育への期待度(%)

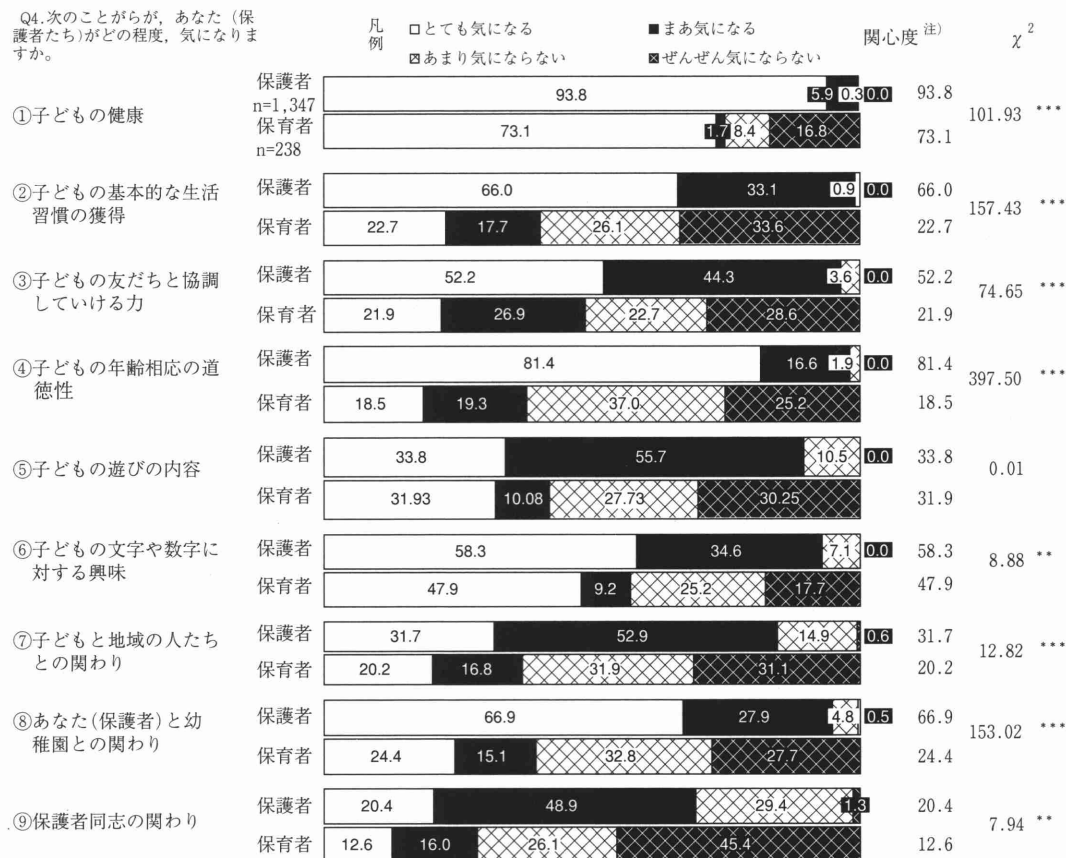
についての記述の割合は平均62.3%、「子どもの学習に対する態度と習慣」という内容が最も多かった(80.5%)。「要望」についての記述の割合は平均53.1%、「子どもの学習に対する態度と習慣」という内容が最も多かった(78.3%)。4類型の中で「不安」についての平均記述率は他の平均記述率より高かった。保育者の自由記述をみると、「園児の様子」についての記述の割合は平均51.3%、「子どもの基本的な生活習慣」という内容が最も多かった(85.7%)。「親の様子」についての記述の割合は平均56.5%、「子どもの学習に対する態度と習慣」という内容が最も多かった(89.2%)。

IV. 考 察

1. 中国における学齢前幼児の身につけている力と態度の実態

学齢前幼児の身につけている生活能力に関する質問紙を用いて、保護者による学齢前幼児の身につける生活能力の到達度を評価したところ、全体から見ると、挙げられた生活能力の到達度が高く、特に「年齢相応の道徳性」、「友だちと協調していける力」、「基本的な生活習慣」が注目されている。これに対して、保育者の評価は全体的に低い到達度を示し、上述の3項目は、逆に未到達度が高かった。両者に評価のズレが見られ、保護者が甘いものについて保育者が厳しいというものである。その「身につけている」と「身につけていない」の評価の分岐点

Q4. 次のことがらが、あなた（保護者たち）がどの程度、気になりますか。



注) 関心度：「とても気になる」と答えた保護者と保育者の割合 (%) を示している。***：p<0.001, **：p<0.01。

図2 子育てに対する保護者の関心度 (%)

を考えると、保護者は家庭におけるしつけの方針、目安によって評価した一方、保育者は園の教育方針、目標および自身の保育経験によって評価したことではないかと推測される。評価のズレがあまり大きく、どちらの方がより実態に近いかは、数値だけでは判断できないと考えられる。

ところが、保護者の自由記述をみると、かなりの保護者はわが子の身につける生活能力の実態に不満を持っており、数値的結果とは対照的であった。「子どもは欲しいものがあつたら、すぐ手に入れたがり、いくら説得してもがまんできない。子どもを甘やかしてはならないと思うが、親同士の話を知いたら、他家の子どももそうなので、自分も結局子どもに従ってしまった」、「一人っ子に他者への思いやりと協調性を

育てるのは難しいので、一人っ子への家庭教育を指導してほしい」、「みな一人っ子なので、幼稚園にいても『利己的』という短所を補うことができず、その対応を望む」、「集中力や自習力など基礎となる学習力は幼稚園で獲得させてほしい」（保護者の自由記述より）など、子どものしつけに対する保護者の甘さや自信のなさが感じられた。さらに、保育者が「基本的な生活習慣がまったく身につけていない4歳児が字をよどみなくすらすら読む」、「勉強（習いごと）さえできれば良いと思っている親が多い」（保育者の自由記述より）と語って、子どもは親の世話を受動的に享受し、あとは習いごとさえすればよい、という知的教育を偏重する傾向が窺われる。保護者はしつけの目安が低く、しつけのポイントがずれている、という家庭のしつけ

の現状を両者の自由記述から描き出すことができる。したがって、保護者自身が述べる自分の姿勢を見ると、保護者の到達度の意識は子どもの実際の到達度に遠いと考えられる。

2. 身につける生活能力の獲得に対する幼稚園教育への期待

本研究の結果から、「子どもの将来への期待」と「自分が受けた家庭教育」を2つの柱として、家庭教育の基本としている親が多い。特に、上の世代の期待に添えず、大学に進学できなかった親は、その夢をわが子に託している傾向が見られた。さらに、米谷が行った、同じ天津市の中学校で保護者に「子どもの将来への希望」を調査した結果では、学者、大学教授、外国留学、科学者と答えた保護者が90%以上を占めている²⁾。現代の親たちの期待は、自分の親からかけられた期待に、勝るとも劣らずといえよう。

一方、家庭教育に関する親たちの考え方と、学齢前幼児の獲得できる力と態度に関する幼稚園教育への親の期待を合わせてみると、「幼稚園の方針」を家庭教育の基本としている保護者が2割に過ぎなかったのに対して、5割以上の保護者は、項目として挙げられた子どもの生活能力は幼稚園教育を通して、「十分身につけることができる」と肯定している。また、すでに例を挙げた自由記述によると、幼稚園教育の力を借りて、子どもの身につける生活能力の不足および、一人っ子に対する家庭教育の不足を補充しようとする保護者が多く、家庭のしつけを幼稚園に依存する傾向が見られた。これらの矛盾した結果は、家庭におけるしつけ機能不全および、子どもの身につける生活能力の不足の現状が両者のズレの中で反映しているようである。

また、保護者と保育者の獲得できる生活能力に関する幼稚園教育への期待度を比べたところ、「友だちと協調していける力」への期待は両者のズレが一番大きかった。幼稚園にいても、同年齢の一人っ子同士の中で協調性を養いにくいことを保育者が感じると同時に、親が子どもに「習いごとを多く行かせ、友達と遊ぶ時間も少なくなってきた」（保育者の自由記述より）ことも指摘された。「友だちと協調していける

力」の獲得は、幼稚園と家庭や地域が共同して子育てを行うという意識を高めていく必要性を示唆している。

3. 子育てに対する保護者の関心

保護者において、調査用紙の回収率は91.1%、自由記述の記入率は80.7%と高率であり、子育てに対する関心の高さが実感された。自由記述の記入内容を見ると、「不安」の傾向も高かった。日本の原田は「育児熱心と育児不安は車両の連結のように連動しやすい」ことを指摘している³⁾。本研究の自由記述においても、記入率の高さは育児に対する熱心さと不安の高さを表しているといえよう。したがって、子育てに対する高い関心と不安をよい方向に導くため、一人っ子の育児指導を行うのは極めて重要である。

「子どもの健康」は保護者の一番の関心ごとであることが本研究の調査結果で明らかになったと同時に、「親たちの過保護」も保育者の記述に如実に反映されている。「小さな怪我でも、すぐ医者に飛んでいく」、「少食なので、健康食品で補う」（保育者の自由記述より）など些細なことでも深刻にとらえようとしている。その反対に、「子どもの偏食を気にしていない」親、「朝からあくびが多い」、「体力がなく、怪我をしやすい」、「冬、風邪を引きやすい」（保育者の自由記述より）子どもが多くなってきた。結果として、保育者に評価された「年齢相応の体力」および「最後までがんばりぬく力」の達成度は低くなっている。

「親たちの過保護」に応じた対応策として、本調査の対象となったある園はひ弱な子どもを鍛える「冷水浴」（冬でも幼児に冷水シャワーを浴びせる、または冷水タオルで体を拭かせる）教育法を取り入れていることが汪によって報道されている⁴⁾。親たちは冷水浴により過保護に育てられた一人っ子が心身ともにたくましくなる効果を期待しているが、「幼稚園では親に対して、過保護に陥らないように対処策を指導してほしい」（保護者の自由記述より）と思っている親も少なくないようであった。

一方、昔の中国の家庭教育は道徳教育を中心としたが、現在の家庭教育でも依然として重んじられている。本研究においては、子どもに「規

律正しく」、「勤勉な習慣」、「他者への思いやり」(保護者の自由記述より)など道徳性の養成に対して、関心度が「子どもの健康」の次に高かった。ところが、保育者の目に映る「子ども中心」の親は、「子どもに幸福な子ども時代を送らせる」(保護者の自由記述より)として、存分に子どもに満足させ、「食べること、飲むこと、着ること、遊ぶことなどそのレベルが高ければ高いほどよい。すべて子どもが喜ぶため、願いは何でも叶えてやる」(保育者の自由記述より)。「子どもを愛するため」と家庭教育を解釈する、という傾向は中国の家庭教育においてよく指摘される問題点の一つである⁵⁾。このような家庭環境で育てられた子どもは、「年齢相応の道徳性」が低下してきたと保育経験の長い保育者はすでに感じている。また、保育者全体は、家庭において、「子どもの道徳性の獲得に対する無関心」、「幼稚園との関わりに対する無関心」などの問題があることを危惧している。家庭教育における「夫婦協力」は提唱すべき家庭教育の方針であるが、家庭教育は幼稚園教育と密接に調和し、相互に補充し合って教育の協力を形作っていくべきであろう。

V. ま と め

「一人っ子社会」における中国の学齢前幼児

は、「年齢相応の道徳性」、「基本的な生活習慣」、「友だちと協調していける力」など学齢前幼児の身につける生活能力が不足している傾向にあることが今回の調査で明らかになった。これらの問題は幼稚園教育に限界があるというより、家庭教育の責任が大きいのと思われる。その一因として、親のしつけの目安が低い、家庭のしつけまで幼稚園に依存、家庭教育が十分機能していないことが考えられる。今後、家庭教育の強化および幼稚園教育の質の向上とともに、家庭・地域・幼稚園三者の連携のうえ、相互的に補助する体制が望まれる。

文 献

- 1) 高 健, 郷間英世, 小寺沢敬子, 他. 就学前幼児の社会生活能力について—日本と中国の比較を通しての検討—, 小児保健研究 1999; 58(4): 458-464.
- 2) 米谷弘光, 高 健, 小林佳子, 他. 家庭における中学生の父親像—日中比較を通しての検討—, 第48日本小児保健学会講演集 2001; 252-253.
- 3) 原田正文. 育児不安を超えて. 朱鷺書房. 1993.
- 4) 汪 敏華. 冷水浴. 今晚報 2002; 5月13日.
- 5) 曹光会. 家庭教育的盲区. 家庭教育報 家庭教育専刊 1999; 11月11日.